意図的および無意図的に想起された自伝的記憶の 特定性の比較

雨宮 有里^{1,2} 高 史明 東京大学 関口 貴裕 東京学芸大学

Comparison of the specificity of musically cued autobiographical memories

Yuri Amemiya, Fumiaki Taka (*University of Tokyo*),
and Takahiro Sekiguchi (*Tokyo Gakugei University*)

This paper compared the specificity of recollections of autobiographical memories where musical cues for events were varied. We used music which was popular in the past as cues which were related to a larger number of past individual events (frequent events cues) and music which was typically only sung at graduation ceremonies as cues which were related to a smaller number of events (rare events cues). In the instructed retrieval condition, participants were told to listen to the music and to recall past events, whereas in incidental retrieval condition, the instruction was only to listen to the music. Then participants were asked to describe what they recalled while hearing the music. When frequent events musical cues were played, the specificities of the recalled events were higher in the instructed retrieval condition than in the incidental retrieval condition. In contrast, when rare events musical cues were played, there were no differences in the specificities of the recalled events.

Key words: involuntary memories, music, autobiographical memories.

The Japanese Journal of Psychology
2011, Vol. 82, No. 3, pp. 270-276

過去に経験した個人的出来事の記憶を自伝的記憶 (autobiographical memory) という。その想起形態には思い出そうと意図して想起する意図的想起 (voluntary recollection) と、思い出そうという意図がないのに出来事がふと意識にのぼってくる無意図的想起 (involuntary recollection) の二つがある。両者は、想起意図の有無だけでなく想起された出来事の性質や検索過程が異なる可能性が指摘されている (神谷, 2003)。このため先行研究では自伝的記憶の性質やメカニズムを統合的に把握するため、意図的想起と無意図的想起がどのような点で異なるかの比較を行ってきた。このうち近年の研究では、両想起形態での出来事の実索過程の違いを反映するものとして、想起された

出来事の特定性 (specificity) を比較したものが多い (Berntsen, 1996, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008)。特定性とは想起された出来事がどのくらい個別の経験を参照しているかを表す概念である。例えば“高校生のとき初めてのデートで水族館に行った”という想起内容は、その日時や場所が特定可能であり特定性の高い出来事を想起していると言える。一方“昔はよく水族館に行った”という想起内容は時間的に広い範囲に及んでおり個別の経験を参照していないため特定性の低い、概括的な出来事の想起である。

では、意図的想起と無意図的想起ではどちらが特定性の高い出来事を想起しやすいのであろうか。先行研究では、無意図的想起の方が意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されやすいという結果が得られている (Berntsen, 1996, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008)。例えば Berntsen (1998) や Berntsen & Hall (2004) では、意図的想起のデータを手がかり語法 (単語を手がかりとして過去の出来事の想起を求める方法) で、無意図的想起のデータを日誌法 (日常生活の中での無意図的想起を実験

Correspondence concerning this article should be sent to: Yuri Amemiya, Life Skill Education Institute in the Graduate of School of Hosei University, Fujimi, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8160, Japan (e-mail: twomoons_t@yahoo.co.jp)

¹ 研究の遂行にあたりご協力いただきました東京大学大学院 杉本 崇氏と貴重なアドバイスを頂きました法政大学 越智 啓太先生に感謝いたします。

² 現所属：法政大学大学院ライフスキル教育研究所

参加者が記録する方法)でそれぞれ収集し、想起された出来事の特定性を比較している。その結果、無意図的想起の方が意図的想起に比べ特定性の高い出来事がより多く想起されるという結果が得られた。これと同様の結果は、無意図的想起のデータを注意集中課題(視覚検出課題に注意を集中し、その間の無意図的想起を実験参加者が報告する方法)で収集した Schlagman & Kvavilashvili (2008)でも報告されている。この結果を Berntsen & Hall (2004)は、自伝的記憶が抽象度の異なる自伝的情報の階層構造で貯蔵されるという Conway & Pleydell-Pearce (2000)のモデルを用いて説明している。この説明では、無意図的想起が生じるのは主に特定性の高い出来事に関連した手がかりに出会った時であり、それにより個別の出来事が特定性の高い情報の階層から直接検索される。一方、意図的想起の場合、想起手がかりの呈示を受けて、それに関連した自伝的情報の階層から特定性の高い情報の階層へと検索がすすむ。だが、この検索がすべて特定性の高い出来事の階層へと到達するわけではない。このため、無意図的想起の方が意図的想起よりも特定性が高い出来事が多く想起される。

しかしながら、上記の先行研究には、いくつかの点で方法論上の問題がある。第一に、先行研究では無意図的想起と意図的想起とで想起の手がかりが異なっている。例えば、日誌法を用いて無意図的に想起された出来事の特定性を調べた研究では (Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004)、多くの場合“引き出しにしまわれたラブレター”のように具体的な事物が想起手がかりとなっている。こうした具体的な事物は、そのラブレターをもらった瞬間のことなど特定の出来事の記憶と結びついていると考えられる。一方、これらの研究では、無意図的想起と意図的想起の比較のために、意図的想起条件として、実験参加者に単語(例えば、手紙)を手がかりとして過去の出来事の想起を求めている。この場合、例えば“手紙”という単語は、その象徴機能により、手紙にまつわる様々な出来事や、より抽象的な自伝的情報(例えば、小学校のとき文通をしていた)へのアクセスを可能にすると考えられる。このことから、両想起形態における想起された出来事の特定性の違いは、想起形態による検索過程の違いを反映したものではなく、出来事の想起を引き起こす手がかりの違い、より具体的には想起手がかりがどれだけ多くの出来事と結びついたものであるかの違いを反映したものである可能性が考えられる (Berntsen, 1998)。

第二に、先行研究では、無意図的想起を調べる方法が意図的想起を調べる方法に比べ、特定性の低い出来事をより検出しにくいものであった可能性がある。先行研究では実験参加者に、日常生活や別の課題の遂行中に出来事の無意図的想起が生じたかをモニタリング

してもらい、それに気づいたら報告してもらうという手続きをとっている。しかしながら、無意図的想起は瞬間的な現象であり、そのことに気がつかないことも多い(神谷, 2003)。そのため、このような手続きで報告されるものは想起したことが強く意識されるものに偏ることとなる。そして、そうした強い想起意識は、抽象度の高い概括的な出来事よりも、特定性の高い具体的な出来事の想起で多く経験されると予想される。一方、意図的想起を調べる場合は、想起された出来事をすべて報告してもらうため、想起された出来事のうち特定性の高い出来事に報告が偏るということは少ないであろう。以上のように、無意図的想起の方が意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されるという先行研究の結果は、想起形態による検索過程の違いを反映したものではなく、想起手がかりや想起内容の報告されやすさの違いが交絡したことで得られたものである可能性がある。したがって、意図的、無意図的に想起された出来事の特定性を比較するためには、これらの方法論的問題を改善した検討を行う必要があるだろう。

そこで本研究では、意図的想起条件と無意図的想起条件とで同じ想起手がかり、同じ報告基準を用いた実験を行い、条件間で想起される出来事の特定性の比較を行う。そのために本研究では、無意図的想起の手続きとして雨宮・関口(2004, 2006)の手続きを用いる。この手続きでは、まず実験参加者に自伝的記憶の無意図的想起を誘発する課題を行わせる(例えば、想起手がかりとなる単語の親密度評定)。次に、誘発課題のすぐ後に、課題を行っている最中に過去の出来事が無意図的に想起されたかを回想させ、想起したものをすべて報告させる。この手法では、誘発課題の刺激として意図的想起条件の想起手がかりと同じものを呈示することで、それぞれの想起形態でどのような出来事が想起されるかを手がかりの違いを交絡させることなく調べることができる。さらにこの手法は、誘発課題の直後に、実験者の指示によって無意図的想起の有無を評価させるため、従来の手続きでは報告されにくかった特定性の低い出来事の想起も検出可能であると考えられる。

また、本研究では、想起手がかりに結びついた出来事の多寡も要因とし、想起意図の有無の効果が、少数の特定の出来事(例えば、卒業式)と結びついた手がかりを用いた場合と多くの出来事に結びついた手がかりを用いた場合とでどのように異なるのかも検討した。意図的想起を対象とした先行研究では、主に単語を想起手がかりに用いてきた。しかし、すでに述べたように言語には象徴機能があるため、例えば“卒業式”という特定の出来事とのみ結びついているように思える単語も、テレビで見た卒業式の場面など様々な出来事の記憶と結びついている。そのため少数の出来

事とのみ結びついた単語を選定するのは難しい。これに対して音楽や匂いなどの感覚刺激は象徴機能を持っておらず、それに関わる特定の出来事とのみ結びついている。そのため、それを聴いたり、嗅いだりした経験頻度によって、少数の出来事とのみ結びついているものもあれば、より多くの出来事と結びついたものもある。そこで、本研究では感覚刺激のうち、呈示が容易で多くの実験参加者を対象にデータを収集することに適した音楽を想起手がかりとして用いた。符号化特定性原理 (Thomson & Tulving, 1970) から、少数の出来事と結びついた想起手がかりとは、その出来事に固有の文脈として符号化された情報であると考えられる。そこで少数の出来事と結びついた想起手がかりとして、卒業式でのみ頻繁に歌われる曲を用いた。一方、多くの出来事と結びついた想起手がかりには、それを聴いた経験の多い CM ソングなどの流行歌を使用した。

方 法

実験参加者

大学生 408 名 (平均年齢 19.4 歳, 男性 223 名, 女性 184 名, 記述なし 1 名) が心理学関係の授業の一環として、匿名かつ自由意志で実験に参加した。実験参加者は二つの講義の受講者であり、講義 1 の受講者が多くの出来事と結びついた想起手がかりの条件 (出来事多条件) に、講義 2 の受講者が少数の出来事と結びついた想起手がかりの条件 (出来事少条件) にそれぞれ参加した。さらにこれらの実験参加者は意図的想起、無意図的想起の各条件のいずれかにランダムに割り当てられた。条件ごとの実験参加者数は出来事多条件において意図的想起条件 50 名、無意図的想起条件 80 名、出来事少条件において意図的想起条件 101 名、無意図的想起条件 177 名であった。無意図的想起条件の方が意図的想起条件よりも実験参加者数が多いのは、前者の方が後者に比べ想起率が低いと予想し、分析可能なデータ数を条件間でほぼ同数にするためであった。

要因計画

想起手がかり (出来事多・出来事少) と想起意図の有無 (意図的想起・無意図的想起) をともに実験参加者間要因とする 2 要因計画であった。

刺激素材

出来事少条件 本実験の 2 ヶ月前に、同じ授業の受講生 204 名に対して卒業式でどのような歌を歌ったかを調べる予備調査を行った。この調査の参加者は本実験の参加者と重なっていたが、これは本実験において卒業式の出来事に結びついた音楽を呈示するという操

作を確実にするためであった (卒業式の歌は人や地域により大きく異なることが予想される)。調査は人種偏見と価値観に関する調査の一部として行われ、質問紙の形で実験参加者に呈示した。質問紙には卒業式で歌うことが多いと考えられる 6 曲の曲名が印刷されており、実験参加者にはその中から卒業式で歌ったことがあるものすべてを選択することと、その歌を歌った時期の報告を求めた。その結果、選択数が多かった“旅立ちの日に”と“仰げば尊し”を出来事少条件の刺激素材とした。また、その経験時期は中学生時という報告が最も多かった。なお、この予備調査は他の調査の中に組み込まれたものであり、卒業式の歌のみに意識を向けさせたり、それに関する想起を促したりするものではなかった。また、調査から本実験の実施までに 2 ヶ月の遅延期間を設けていた。以上のことから、実験参加者が事前に予備調査に参加したことが、本実験での出来事の想起に影響を与えた可能性は低いと考えられる。

出来事多条件 出来事多条件の刺激の選定のために本実験の参加者が中学生であった 2003—2005 年のオリコンチャート上位 5 曲のうち、タイアップがついており頻繁に耳にしたと考えられる 11 曲を刺激素材の候補とした。その上で本実験とは別の同年代の回答者 15 名に対し、5 名以下の小集団形式で音楽の聴取頻度 (7 段階) と関連情報数の調査を行った。関連情報数は音楽に関連した出来事を文章で記述させ、その数を指標とした。調査では各曲について曲のサビの部分 (約 15 秒) を呈示し、その終了直後に評価を行うよう求めた。各曲の聴取頻度と関連情報数の平均値を求めたところ、“世界にひとつだけの花 (SMAP)” が両指数ともに最も高く、“さくら (森山直太郎)” と “花 (ORANGE RANGE)” がそれに続いた。しかし“さくら”は高校の卒業式で歌ったという報告が多く、多くの実験参加者にとり特定の出来事と強く結びついた想起手がかりである可能性が考えられた。そこで“世界にひとつだけの花”と“花”を刺激素材として選定した。

想起された出来事の特定性の評価

想起された出来事の特定性は、後述の質問紙により実験参加者自身に評価してもらった。質問文について、Berntsen & Hall (2004) の質問文を直訳した“想起された出来事が特定の出来事か／特定の出来事でないか”という文を用いた予備実験を行ったところ、特定の出来事という表現が理解できない、もしくは、あまり経験しない特別な (special) 出来事という判断基準を用いたとの内観報告が多く得られた。そのため、本研究では、Berntsen & Hall (2004) の特定性の定義をよりわかりやすい質問に直した“想起された出来事はある日・あるときに経験した個別的な出来事か／何

度も経験した出来事がぼんやりまとまったものか”という質問文により、特定性の評価を求めた。また、それに加えて、実験参加者が報告した想起内容に対し2名の評定者が独立に特定性の評定を行い、それを外的基準に基づく評定とした。

質問紙

無意図的想起 無意図的想起の誘発課題、および想起内容を回答するための質問紙を冊子形式で作成した。冊子には、まず無意図的想起誘発課題の教示として“音楽が、その後の課題にどのような影響を与えるのかを調べるものです。音楽が流れたらそれをよく聴いてください”と印刷されていた。次のページには、無意図的想起の生起から報告までに遅延期間を設けるためのフィラー課題（一桁の数字の計算課題）が印刷されていた。このフィラー課題は、予備調査において、無意図的想起誘発課題と想起の報告が時間的に近すぎると、どちらの段階で想起が起きたかの判別が困難という指摘が得られたため用意した。その次のページには、自伝的記憶の想起に関する質問文“先ほど音楽を聴いていただきましたが、その際に過去に経験した出来事を思い出しましたか？”と想起の有無の報告を求める回答欄が印刷されていた。そしてその下に想起内容の記述を求める教示“どのような出来事を思い出しましたか？ 文章で記述をお願いします。複数思い出した場合は、思い出した順番に出来事をお書きください”とそのための回答欄が印刷されていた。また、プライバシー保護のため、具体的に記述したくない場合にその旨を報告するチェック欄が用意されていた。最後に、操作チェックのために、用意した想起意図の有無を問う質問項目“何か思い出そうという気持ちがあった／思い出そうという意図はなかった”と特定性の判断を求める質問項目“想起された出来事はある日・あるときに経験した個別的な出来事か／何度も経験した出来事がぼんやりまとまったものか”が印刷されていた。

意図的想起 冊子は無意図的想起条件のものとはほぼ同じであり、想起課題の教示“音楽に関連する課題を行うことが、その後の課題にどのような影響を与えるかを調べるものです。音楽が流れたら、それに関連する過去の出来事を思い出してください”と、出来事の報告を求める質問文“先ほど音楽を聴いてそれに関連する出来事を思い出す課題をしていただきましたが、その際に過去に経験した出来事を思い出しましたか？”のみが異なっていた。

手続き

実験は授業時間内に集団形式で行った。実験の目的は、音楽が認知に与える影響を調べることでであると説明した。まず実験参加者に、質問紙に印刷された無意

図的もしくは意図的想起課題の教示文を読ませた。次に刺激素材である音楽（約30秒、2曲を連結したもの）を教室備品のスピーカーを用いて呈示した。そして、実験参加者にフィラー課題を20秒間行ってもらった後、出来事の想起の有無とその内容の回答を求めた。これ以降の質問には各自のペースで回答してもらった。実験に要した時間はおよそ20分であり、実験終了後、口頭でデブリーフィングを行った。

結 果

操作チェック

意図的想起条件のデータのうち、出来事の想起がなかった実験参加者（出来事多条件10名、出来事少条件10名）、および出来事を無意図的に想起したと報告した実験参加者（出来事多条件9名、出来事少条件7名）のデータを“意図的想起なし”とみなし、意図的想起の生起率を算出した。その結果、意図的想起の生起率は、出来事多条件で62.0%、出来事少条件で83.2%となった。同様に、無意図的想起条件において出来事の想起がなかった実験参加者（出来事多条件44名、出来事少条件36名）、および出来事を意図的に想起したと報告した実験参加者（出来事多条件5名、出来事少条件17名）、回答を途中で放棄した実験参加者（出来事少条件4名）のデータを“無意図的想起なし”とみなし、無意図的想起の生起率を求めた。その結果、無意図的想起の生起率は出来事多条件で38.8%、出来事少条件で67.8%となった。両条件の想起生起率は十分に高く、分析可能なサンプルサイズであったため、想起意図の操作は適切であったといえる。

特定性

実験参加者により個別的な出来事と評価された回答を特定の出来事、何度も経験した出来事がまとまったものと評価された出来事を概括的な出来事とし、想起された出来事の特定性について分析を行った。その際、特定性に関する回答のなかった11名（意図的想起条件の出来事多条件1名、出来事少条件3名、無意図的想起の出来事多条件4名、出来事少条件3名）のデータは欠損値として扱った。各条件で想起された特定の・概括的な出来事の比率をそれぞれTable 1に示す。まず、出来事多条件で想起意図の有無により特定の・概括的な出来事の比率に差があるかを検定したところ有意差が見られたため（ $\chi^2(1, N=65)=4.92, p<.05$ ）、残差分析を行った。その結果、無意図的想起条件では特定の・概括的な出来事の比率に有意差はなかったが、意図的想起条件では、特定の出来事の方が概括的な出来事よりもその比率が有意に高かった（ $p<.01$ ）。このことから、出来事多条件では、意図的想起条件の方が無意図的想起条件よりも、より高い確

Table 1
実験参加者による概括的な出来事・
特定の出来事の評価の比率

	出来事多		出来事少	
	概括的	特定の	概括的	特定の
無意図的想起	41.1%	58.9%	37.8%	62.2%
意図的想起	16.1%	83.9%	26.6%	73.4%

率で特定の出来事が想起されたといえる。次に出来事少条件において、意図的想起条件と無意図的想起条件とで概括的・特定の出来事の比率に差があるかを検討したところ、有意差は見られなかったが ($\chi^2(1, N=190)=2.64, ns$)、両想起条件とも特定の出来事の方が概括的な出来事よりも有意に高い確率で想起されていた ($p<.01$)。

また本研究では、想起された出来事の記述をもとに、Baddeley & Wilson (1986) の基準に従い 2 名の評定者が 0—3 の 4 段階 (値が高いほど特定性が高い) で特定性の評定を行った (評定者間の一致率 79%)。しかしながら評定者の評定と実験参加者の評価の一致度を点双列相関係数により評価したところ、出来事少条件で $r=0.08 (ns)$ 、出来事多条件でも $r=0.47 (p<.05)$ とどちらも相関係数は低く、出来事の特定性に関する評定者の評定と実験参加者の評価が必ずしも一致していないことが示された。実験参加者による評価数の内訳は、評定者が特定性 0 と評定したものに対し概括 6、特定 4、特定性 1 に対し概括 8、特定 11、特定性 2 に対し概括 25、特定 44、特定性 3 に対し概括 36、特定 106 であった (内容の記述がなく特定性の評定ができなかった 15 名のデータを除く)。本研究では想起内容をどの程度詳細に書くかを実験参加者に具体的に指定していなかった。そのため、想起内容の記述の詳細さの基準が実験参加者によって異なっていた可能性がある。すなわち、詳細な出来事を思い出したとしても、実験参加者によってはそれをそのまま詳しく記述したかもしれないし、簡単に書く場合もあったかもしれない。そして、こうした実験参加者による記述の詳細さの基準の違いが、記述内容を通じた特定性の評定と実験参加者自身による評価が一致しなかった原因となったのかもしれない。そこで本研究では、評定者の評定はあくまで実験参加者の記述をもとにした間接的なものであることを踏まえ、実験参加者自身による評価の方が特定性の測度として妥当であるとみなした。なお確認として、評定者による評定値も分析したところ、出来事多条件における意図的想起条件の特定性 (中央値=2) は無意図的想起条件の特定性のそれ (中央値=1) より有意に高く ($U=301.0, p<.05$)、一方、出来事少条件の特定性は想起意図の有無による差は見られなかった (ともに中央値=3, $U=5026, ns$)。

すなわち、評定者による評定においても、実験参加者による特定性の評価と同じ結果が得られた。

考 察

本研究は意図的に想起された出来事と無意図的に想起された出来事とで、その特定性がどのように異なるか、またその違いが、想起手がかりが多くの出来事と結びついている場合と少数の出来事に結びついている場合とで、どのように異なるかを検討した。その結果、多くの出来事と結びついた想起手がかりが呈示された場合、意図的想起の方が無意図的想起に比べ、特定性の高い出来事がより多く想起された。一方で、少数の出来事と結びついた想起手がかりが呈示された場合、意図的想起と無意図的想起とで特定性の高い出来事を想起する比率に差は生じなかった。本研究の結果は、無意図的想起の方が意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されるという先行研究 (Berntsen, 1996, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008) の結果とは異なるものである。しかしながら、序論で述べたように、これらの先行研究にはいくつかの点で方法論的な問題がある。例えば、Berntsen (1996, 1998) や Berntsen & Hall (2004) の研究では、無意図的想起と意図的想起とで想起手がかりとなる刺激が統一されていない。一方、Schlagman & Kvavilashvili (2008) の研究は、両想起形態で同じ想起手がかりを使用しているが、無意図的想起を調べる方法が意図的想起を調べる方法に比べ、特定性の低い出来事を検出しにくいものであったかもしれない。これらのことから、先行研究の結果は、想起手がかりの違いや想起内容の報告されやすさの違いを反映したものであった可能性が考えられる。これに対して本研究は、意図的想起条件と無意図的想起条件とで同じ想起手がかりを用いている。また、無意図的想起条件では、想起の直後に教示によってそれに意識を向けさせるため、特定性の低い出来事であってもそれを検出可能である。したがって本研究の結果は、両条件での想起手がかりの違いや想起内容の検出やすさの違いを反映したのではなく、それぞれの想起形態で、自伝的記憶の検索がどのように進化したかの違いを反映したのだと考えられる。

では、本研究の結果を、自伝的記憶の検索過程からどのように説明が可能だろうか。本研究では、Conway & Pleydell-Pearce (2000) の階層構造モデルをもとに以下のように考えた。まず、多くの出来事と結びついた想起手がかりが入力された場合、意図的想起、無意図的想起ともに、様々な出来事が抽象化された情報を貯蔵する特定性の低い階層において、それに関連した自伝的情報が活性化すると考えられる。このように両想起形態は、はじめにアクセスする階層は同じであるが、その後の検索過程が異なる。意図的想起

の場合、参加者には過去に経験した出来事を想起するという目的が与えられている。そして、この目的は出来事の詳細情報を想起することによって達成されるため (Conway & Pleydell-Pearce, 2000)、特定性の高い情報が保持された階層へと能動的な検索が行われる。これは Conway & Pleydell-Pearce (2000) の生成的検索 (generative retrieval) に当たると考えられる。一方、無意図的想起の場合、過去の出来事を想起するという目的はない。そのため、検索は特定性の高い階層へ進むように方向づけられておらず、多くの場合、はじめに活性化した自伝的情報がそのまま意識にのぼる (直接的検索: direct retrieval)。この結果、意図的想起の方が無意図的想起よりも特定性の高い出来事を想起しやすくなるのではないだろうか。

一方、少数の特定の出来事と結びついた想起手がかりが入力された場合、意図的想起、無意図的想起ともに、出来事の詳細情報を貯蔵する特定性の高い階層でそれに関連した自伝的情報が活性化される。この時、意図的想起では、特定性の高い出来事を想起しようとするが、すでにそれに関連する情報が活性化しているため、さらに検索を進める動機は生じない。また、無意図的想起の場合、検索の方向づけがないため、やはり特定性の高い出来事の情報とそのまま想起される。このために両想起形態ともに特定性の高い出来事を同程度の確率で想起したと考えられる。

Berntsen & Hall (2004) は、無意図的想起は常に特定性の高い階層からの直接的検索により生じると考えていたが、そう考えた場合、出来事多条件の無意図的想起条件において、特定性の高い出来事と特定性の低い概括的な出来事が同程度の確率で想起されたことを説明できない。これを説明するためには、むしろ上記のように、無意図的想起も意図的想起と同様、様々な特定性の情報にアクセス可能であると考え必要がある。そして、両想起形態での想起される出来事の違いは、検索の開始位置の違いではなく、その後の能動的な検索の有無を反映するのではないだろうか。また、意図的想起、無意図的想起ともに、どの階層に最初にアクセスするかは、想起のための手がかりがどの程度多くの出来事と関連したものであるかにより異なっており、少数の特定の出来事と結びついた手がかりからは、特定性の高い情報の階層へとアクセスが行われ、一方、多くの出来事と結びついた手がかりからは、抽象的な情報の階層へと最初のアクセスが行われるのであろう。

なお、本研究の問題点として、出来事少条件で、想起手がかり (卒業式の歌) を選出するための予備調査の参加者と本実験の参加者が同じであったことがあげられる。この予備調査は、他の調査の一部として行われ、また調査から本実験までに2ヵ月の間をとったため、それへの参加が本実験での出来事の想起に影響を

与えることはないと考えた。しかしながら、実験の結果、出来事少条件では、意図的想起条件、無意図的想起条件ともに特定性の高い出来事 (卒業式の出来事) が比較的高い確率で想起されており、これに予備調査において卒業式の歌を考えたことの影響がないとは断言できない。今後、出来事少条件でも、本実験とは別の実験参加者を対象に予備調査を行い、この可能性を排除した上で本研究と同じ結果が得られるかを検討する必要がある。

また、本研究では、実験参加者と評定者として想起された出来事の特定性の評価が一致しなかった。そこで評定者の評定が間接的なものであることを踏まえ、実験参加者自身による評価を特定性の測度として採用した。しかしながら、この二つの測度にはそれぞれに異なる利点と欠点がある。まず、実験参加者自身による評価は、想起内容に対しての直接的な評価であるという利点の一方で、どのような出来事を特定性の高い出来事と判断するか基準が個人によって異なる可能性があるという欠点がある。これに対し、評定者による評定は、外的指標をもとに一定の基準で特定性を評定できるという利点があるが、一方で、実験参加者の記述内容をもとにしたものであるため、その評定が想起内容の記述の程度に影響されるという問題がある。このように二つの測度には、それぞれ一長一短があり、今後、特定性の指標としてどちらの測度を用いることが妥当であるかについては、慎重に議論する必要があるだろう。同時に、この二つの測度の一致率を上げるような工夫、例えば、想起内容の記述の程度を実験参加者に具体的に指示することなども必要であろう。

最後に、本研究では無意図的想起の想起手がかりとしての音楽の有効性が示された。これまで無意図的想起の実験的検討では、想起手がかりとして単語を用いることが多かった (雨宮・関口, 2006; Schlagman & Kvavilashvili, 2008)。しかし、言語は象徴機能を持つため、自ら経験した出来事以外の出来事も含め様々な出来事と関連している。これに対し、音楽はある時期に流行し、様々な出来事と結びついたものから、少数の出来事とのみ結びついたものまで出来事の結びつきを要因として操作しやすい。また、多くの実験参加者に対して容易に呈示可能という利点もある。今後、音楽を想起手がかりとしたさらなる実験的検討を行うことで、無意図的想起を引き起こしやすい想起手がかりやその性質について、より多くのことを明らかにできるだろう。

引用文献

- 雨宮 有里・関口 貴裕 (2004). 自伝的記憶の無意図的な想起に関する実験的検討 東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学, 55, 93-99.

- (Amemiya, Y., & Sekiguchi, T. (2004). An experimentally study on involuntary recollection of autobiographical memories. *Bulletin of Tokyo Gakugei University*, **55**, 93-99.)
- 雨宮 有里・関口 貴裕 (2006). 無意図的に想起された自伝的記憶の感情価に関する実験的検討 心理学研究, **77**, 351-359.
- (Amemiya, Y., & Sekiguchi, T. (2006). An experimental study of the emotional valence of involuntarily recalled autobiographical memories. *Japanese Journal of Psychology*, **77**, 351-359.)
- Baddeley, A. D., & Wilson, B. A. (1986). Amnesia, autobiographical memory and confabulation. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 225-252.
- Ball, C. T., Mace, J. H., & Corona, H. (2007). Cues to the gusts of memory. In J. H. Mace (Ed.), *Involuntary memory*. Malden, MA: Blackwell. pp. 113-126.
- Berntsen, D. (1996). Involuntary autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **10**, 435-454.
- Berntsen, D. (1998). Voluntary and involuntary access to autobiographical memory. *Memory*, **6**, 113-141.
- Berntsen, D., & Hall, N. M. (2004). The episodic nature of involuntary autobiographical memories. *Memory & Cognition*, **32**, 789-803.
- Conway, M. A., & Pleydell-Pearce, C. W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- 神谷 俊次 (2003). 不随意記憶の機能に関する考察——想起状況の分析を通じて—— 心理学研究, **74**, 444-451.
- (Kamiya, S. (2003). Some observations on the functions of involuntary memory: An analysis of the circumstances surrounding occurrence. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 444-451.)
- Schlagman, S., & Kvavilashvili, L. (2008). Involuntary autobiographical memories in and outside the laboratory: How different are they from voluntary autobiographical memories? *Memory & Cognition*, **36**, 920-932.
- Thomson, D. M., & Tulving, E. (1970). Associative encoding and retrieval: Weak and strong cues. *Journal of Experimental Psychology*, **86**, 255-262.
- 2009. 1. 16 受稿, 2011. 1. 22 受理 ——